イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール（武田千香、江口佳子訳）
『曲がった鋤』
水声社、2023年、322頁（紹介者：洲崎圭子　お茶の水女子大学）

ブラジルは雄大だ。多様性に富んだ気候風土のもと、広大な土地にさまざまな植生を有している。本書においては、そこに暮らす人々と多くの動植物が共生している様子が丹念に描写される。登場人物たちは旱魃や洪水も経験するなど、自然に大きく左右される人生を送る。ブラジル北東部の風景描写とともに本書を読み進むにつれ、読む側の五感が活性化し始める。筆者には、果てしなく続くブラジルの大地をすすむ長距離バスの車窓と爽やかな風が蘇り、アマゾンの奥地の村で食したアサイー果汁の新鮮な香りが漂ってくる。たとえ現地を訪れたことがなくとも、行間から立ち上がる大地の息づかいを実感することだろう。地元特有の花や鳥の名に、ポルトガル語の発音がそのままカタカナで表記され、簡潔な割注が付されている――例えば、サビア・ボステイラ［ツグミ科の鳥］――のも、作品のイメージを広げる際に有用である。

本書が最初に刊行されたのはブラジルではなく、2018年にポルトガルでレヤ賞を受賞した翌年にまずレヤ社から受賞作品として出版された。同じ年にブラジルでも出版され、2020年にブラジルの主要な文学賞であるジャブチ賞とオセアーノ賞をダブル受賞して話題になった。著者はブラジル、バイーア州都サルヴァドール出身のイタマール・ヴィエイラ・ジュニオール。1979年生まれで、バイーア州の先住民とアフリカ出身の黒人の先祖を持つ。地理学を修めた後、アフリカ民族学で博士号を取得、国立植民農地改革院（INCRA）にも勤務した。小説の舞台である同州奥地での駐在経験があるため、この作品は同地での経験が土台になっていると、2023年4月の来日時に語っている。本書では、土地に根付く宗教行事ジャレの実践が丁寧に描かれる。そうした様子は、フィールド先で見聞きしたことや出会った人々をモデルにとっているからである。

物語では、20世紀後半、代々、白人地主が所有する大農場で農民たちのほとんどが奴隷の子孫として、居住権と引き換えに労働力を提供する奴隷同然の状態に置かれている様子が語られる。黒い肌を持ち、この地で暮らす姉妹ビビアーナとベロニージアが、各々第一部と第二部の語り手となる。幼少時、祖母が隠していたナイフを見つけて舌にあてがったことから、妹は舌を失い、姉は妹の失われた声の代弁者となる。姉妹の父親は、精霊を呼び出す能力を有するジャレの祭司兼治癒師であり、農民たちのまとめ役でもあった。妹が生まれた土地にとどまる他方で、姉ビビアーナは引っ越してきた従兄と結婚しいったん農場を離れる。だが若い夫婦は時を置かずに舞い戻り、農場の労働環境の改善と改革のために立ち上がる。そして、軋轢は悲劇を生む。声と沈黙、豊穣と不毛、都市と地方といった対立項は、姉妹の関係を特徴づけるものでもある。第三部においては、すべてを知る精霊が語り手となる。その語りが次々と明るみに出す家族や土地の歴史についての描写は、『ペドロ・パラモ』や『百年の孤独』を彷彿とさせる。

本書のタイトルである「曲がった鋤」は、主人公たちの祖先が土を耕す際に使用していた道具であり、未だ完全には消滅していない奴隷制の状態を象徴するものである。農民と地主間の政治闘争をも扱う本書は、人種、階級、奴隷制の負の遺産といった壮大なテーマを軸に、語り手を女性に据えることでジェンダーの観点が加味されることとなり、人種差別と家父長制下で最も弱い立場にある黒人女性の状況を前景化させることに成功している。